

かごしま農36景



農の景

私は学生時代を京都で過ごした。京の街には寺院、仏閣が多い。その佇まいは、りんとしたものを感じさせる。なかでも法然院から南禅寺の東山一帯は、その感を強くする。私は好んで歩いた。時には縁に腰掛け、蓋を時の流れのままに眺めた。その空に伸びる線形は高千穂の峰の伸びやかな稜線を思い起させた。

同じ場所からの同じ方向の景色でありながら、そこには朝な夕な表情があり、四季の顔があった。その景に歴史の重みを感じ、飽きることを知らなかった。だが、暫くして蓋の背後に東山の峰々と赤松の林があることに気付いた。そこには、自然が人間を包み、「人工を自然に従わしめる」調和の妙が得られていると思う。

和辻哲郎はヨーロッパの「緑」に啓示され、『風土』をものした。ヨーロッパの自然は雑草が作物を放逐することのない、洪水までも「きわめてゆるやかな、流れるとも見えぬほどの速度で流れている」。それほどまでに人間に温順であると捉えたが、我が国のそれは「除草や草刈りや排水の配慮や土の固まり方などについて不断の注意、手入れを怠ることができぬ」ほど厳しく、激しい。そのために、我が国では「自然に人工的なものをかぶせるのではなく、人工を自然に従わしめねばならぬ」と説いている。

鹿児島空港一帯は十三塚原と呼ばれるシラス台地。一面に茶畑が広がる。痩せたから辛しかできなかったススキの原が豊穡な台地に生まれ変わって間もない。それは県営の畑地帯総合土地改良事業による。大きく区画されたほ場、真っ直ぐ伸びる農道、一斉に散水する自動装置など台地は姿を変えた。新しい秩序が新しい景観を生み出している。だが、その秩序は和辻哲郎の説く、自然との調和のなかで創出されなければならないだろう。そうでないと田や畑は人に語りかけてこないだろう。また、人は農村に腰を下ろさなければならぬ。

五月初め、空港に降り立った若い旅人二人、茶畑の緑に感嘆の声をあげた。二人の額に汗が光る。「鹿児島は暑いから、茶畑にまで扇風機が立っているわ」と驚きの声。そこには、緑豊かな空間を遮るようにコンクリートの支柱が林立している。霜除けのファンは、夏まで立ち続けても自然と調和できそうにない。

(1994年5月)

◇「かごしま農36景 / 発行:鹿児島県農業農村整備情報センター」より

文:門松経久

写真:本寺一弘「里の春」第1回かごしまフォト農美展